

The Spread of Eternal “Hojo” (Part 2) —Saki no Chusho O Imperial Kaneakira as a trigger—

Toru Fukazawa

Keywords: 50 years old, Minamoto no Kaneakira, Saga, Shisei no in

Abstract

This paper will focus on the architecture of *chitei* (an arbor by a pond) as a preliminary step, while being aware of Kamo no Choumei's *Hojoki* as the final point of discussion. The *Shinden-zukuri* is known as the residence of nobility. Chitei was one of the buildings in the corner of Shinden-Zukuri. For scholars of the Chinese classics, it was a place of longing, a purely private space to enjoy a life of fleeting solitude and seclusion between busy political affairs. Therefore, it was a “space of relaxation” where Chinese poetries were often composed and where the games of *kangen* (wind and string instruments) were played.

It was Imperial Kaneakira's work *Chiteiki* that first took on this chitei as a literary subject. The author, Imperial Kaneakira, was once demoted from nobility and took the surname of “Genji.” Later, however, he returned to the Imperial Family and became the Imperial Prince once again. His trajectory resembles that of Hikaru Genji, the main character of *The Tale of Genji*. In fact, Imperial Kaneakira is considered to be one of the inspirations for Hikaru Genji.

In his later years, the Imperial Prince built a mountain villa on the banks of the Ooi River in Sagano, a suburb northwest of Miyako, and enjoyed a quiet life of seclusion. In *The Tale of Genji*, it is said that Hikaru Genji also built Mido (a temple) in Sagano and lived there as a recluse in his later years.

Hakurakuten, a Chinese poet, is one of the forerunners who lived an ideal life at chitei. Influenced by such poetries as *Soudouki* and *Chijyouhen*, the Imperial Prince's secluded life in Sagano was also a form of political protest. For Hikaru Genji, the main character of *The Tale of Genji*, Suma and Akashi were places of exile, and in relation to the Miyako space, Sagano was also a space with the meaning of a pseudo *Haisho* (a place of exile).

The enigmatic way of life of the mysterious person Sagainkunshi told in a collection of narratives such as *Goudanshou* probably later developed into the *Shuten-doji* narrative. Utilizing the above as an auxiliary line, I will take particular note of the conflicting spatial characteristics of “light” and “shadow” that Sagano possesses.

《概要》

果てしなき「方丈」のひろがり（その2） さきのちゅうしょおうかねあきらしんのう ——トリガーとしての、先 中 書王兼明親王——

深 沢 徹

キーワード：五十歳：源兼明：嵯峨：市井の隠

本稿は、鴨長明の『方丈記』を最終的な論の終着点として意識しつつ、その前段階として「池亭（ちてい）」という建築物に着目する。

「寝殿造り」は、平安時代の貴族の邸宅として知られている。その「寝殿造り」の一角に設けられた建物の一つに「池亭」はあった。そこは、忙しい政務の合間に、つかのま隠逸・閑居の暮らしを楽しむ、純然たるプライベートな空間として、当時の漢学者たちの憧れの場となり、それゆえに、しばしば漢詩文に詠まれ、また管絃の遊びの行われる「ゆとり空間」であった。

文学の題材として、この「池亭」を最初にとりあげたのが、兼明親王（かねあきらしんのう）の『池亭記』という作品である。作者の兼明親王は、一旦臣籍に降下して源氏姓を名乗る。しかし後に皇籍に復帰して親王位に返り咲く。その軌跡は『源氏物語』の主人公光源氏によく似ており、そのモデルとなった人物の一人に数えられる。

親王は晩年、ミヤコの西北郊、嵯峨野の大堰川のほとりに山荘を構え、隠逸・閑居の暮らしを楽しむ。光源氏もまた嵯峨野の地に御堂を造り、晩年はその地に隠棲したとの設定が、『源氏物語』ではなされている。

「池亭」での理想の暮らしを実践した先人として、中国の詩人白楽天（はくらくてん）がいる。その『草堂記（そうどうき）』や『池上篇（ちじょうへん）』などの詩文の影響を受け、親王の嵯峨野への隠棲は、政治的な抗議の意味合いも兼ね備えていた。『源氏物語』の主人公光源氏にとって、「須磨」・「明石」が配流（はいりゅう）の地であったように、ミヤコ空間との関係で、嵯峨野もまた疑似的な「配所（はいしょ）」の意味を合わせ持つ空間であった。

『江談抄（こうだんしょう）』などの説話集が伝える、謎の人物「嵯峨隠君子（さがいんくんし）」の不可解な生き方——それはのちに「酒吞童子」説話へと発展したらしく思われる——を補助線として、嵯峨野の地が抱え持つ、その〈光〉と〈影〉の両義的な空間特性に着目していく。

以上

果てしなき「方丈」のひろがり（その2）

——トリガーとしての、先中書王兼明親王——

深 沢 徹

磯崎新は、建築家として異色の存在だ。みずからの専門とする建築関係のジャーナルだけでなく、美術関連の雑誌にも数多く文章を寄せており、岩波書店や鹿島出版会より出された一連のシリーズからは、美術工芸に対するすぐれた審美眼の持ち主であることがうかがわれる。加えて私たちの死生観を問い、空間とのかかわりの中でその身体論にまで説きおよび哲学的な視野の広がりをも併せ持つ^{〔1〕}。現代思想の動向をいち早く察知し、それに機敏に反応して、建築の領域に記号論的な分析手法を積極的に導入したのも磯崎だ。

軸足を「都市デザイン」に置くことに由来してであろう、与えられた敷地内に「建築」が自足し、自閉してしまえば、「都市計画」は単なる机上の空論と化し、いたずらにユートピアを夢想するだけに終わってしまう。「建築」と「都市計画」とのその〈断絶〉をつなぎ合わせ、両者を橋渡しすることで、プランをプランだけに終わらせず、実効性のあるものにしていく。その媒介的役割をはたすものとして「都市デザイン」はあった。個々の建築を単体として取り上げるのではなく、その建築が立地することによって、周囲の環境や景観にどのような影響を及ぼすかを絶えず考える。また実際に使ってみてどうかという人々の「使い勝手」への配慮も怠らない。外国

語への翻訳が難しい、「界限（かいわい）」という日本語の空間意識への着目も、そうした中から導き出されてくる。⁽²⁾

《かいわい》もしくは気配という日本の空間の表現方法は、私たちが日常感じている都市空間が、必ずしも物理的実体のみで構成されているのではないことを適確に表現している。人間をとりまき、その五感のすべてに訴えかけ、または五感によって感じとっているものこそが都市空間である。それを記述し、記録しようと思えば、記号にたよる以外にない。都市は視覚化されたものだけでなく、不可視のものが充滿していると考えると、都市を方法として再編成できると同時に、具体的なイメージにも直接的に下降することが可能になるのではないか。

西洋近代に由来するモダニズム建築の圧倒的な影響下、それへの対抗として「日本的なもの」を求めたわけでは必ずしもない。『空間へ』（美術出版社・一九七二）に収められた「年代記ノート」（一九六九）によれば、建築思想家としての磯崎の原点には、焦土と化した東京の焼け跡風景や、原爆投下によって廃墟と化した広島の記事があった。建築は、それが完成した時点で早くも崩壊が始まる。何もないガランドウの廃墟へと、歩みを始めるとの独自の発想は、こうした戦時体験からくるものだろう。建築は、せんじ詰めれば、その内部に、何もないガランドウの虚ろな空間を演出し、デザインしていくことに尽きる。都市デザインも、またしかり。

磯崎が建築家としてのキャリアを始発させたころ、海に向こうではル・コルビジェなどに代表される機能主義

建築（例えば上野の国立西洋美術館の建物に代表される）が主流だった。デカルト的な合理主義にもとづき、 $x \cdot y \cdot z$ の三次元座標に空間を還元し、コンクリート打ちっぱなしで、それ以外のあらゆる夾雑物をはぎ取ってしまふ。機能主義建築のそうしたユークリッド的な空間構成に、人間不在の兆候を嗅ぎとって、磯崎はその乗り越えを図る。私たちが身を置く空間は、廃墟とも見まがう単なる三次元の広がりとしてあるのではない。人間の「使い勝手」に応じてあちこちでねじれ、自在に伸縮するものとしてある。

詳細については「都市デザインの方法」（一九六三）および「スコピエ計画の解剖」（一九六七）と題されたエッセイに譲るとして、ここではそうした磯崎の立場を端的に指し示す「年代記ノート」の中の言葉を抜き出しておく。⁽³⁾

建築空間とは外在するのではなく、人間がその場所にはいりこみ、それに相対応した瞬間に、内部で感じとる、そのときはじめて存在するような、一種の現象であり、あらゆる論理も方法も、そういう現象を発生させる手段にすぎないのではないか、〈中略〉おそらく建築空間は、ぼくらの意識の内部に発生する事件なのだから、ひどくメタフィジカルなものに違いあるまい。

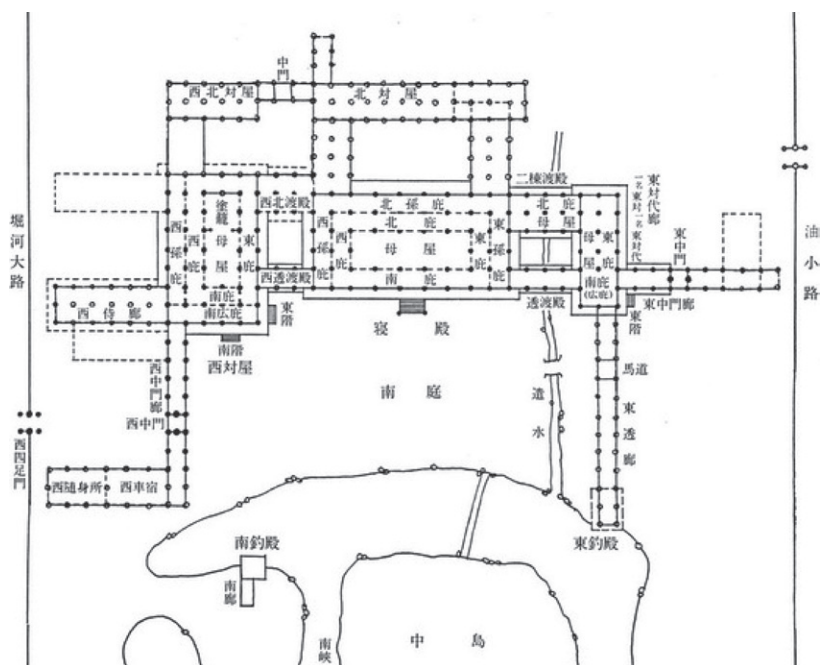
この時期の磯崎の文章に、現象学やハイデッガーへの言及はまだ見られない。しかし、欧米との対比の中で、伝統的な日本の家屋や街並みの特質を論ずることにより得られた特異な発想に、ハイデッガーとの共通項は確かに見てとれる。敗戦国に身を置いたという共通体験がその根底にはあったか。廃墟の中に立たされて、この世界

の内に「居場所」がない。どこにも「身の置きどころ」がない。それどころか、「居てはならない」と名指しされたかのような居心地の悪さ、心の負い目を、両者は共有していた⁽⁴⁾。

とはいえ「都市デザイン」などといったスケールの話へと、一気に飛ぶのはまだ早い。出身地大分の地元の縁故で、地域に根差した個々の建築（たとえば「大分県医師会館」や「大分県立図書館」など）の設計を手がけることから、磯崎の仕事がはじめられたように、まずは個々の建築物を見ていくことから始めたい。対象となるのは「池亭」と称された建物だ。当初は建物単体として、個々の「池亭」は作られた。やがてそれが、より広く、周囲の街並みや都市空間のひろがりとの関係の中でとらえ返され、意識化されてくる。その推移の過程をたどり直すことに本章のねらいはある。

池亭―水辺の憩い空間

平安貴族の理想の居住形態（おそらくは大臣級の）として、当時「寝殿造り」のあったことは、教科書等でよく知られる。その基本パターンは、敷地の中心に位置して母屋の「寝殿」があり、その前に半公的な儀礼の場として玉砂利を敷き詰めた「庭」が広がる。その庭の先に、中の島を設けた「池」を穿つというものだ。寝殿の前に広がる「庭」は、天皇の出御する内裏の正殿「紫宸殿」の南庭（神の降臨を仰ぐ齋庭に由来する）を模したものだろう。有力貴族の邸宅は、しばしば大臣大饗（大臣に就任した際に盛大に執り行われる宴席）などの公的な儀礼の場としても使用された。加えて平安の中ごろ以降、内裏の度重なる焼亡により、その代替施設として、

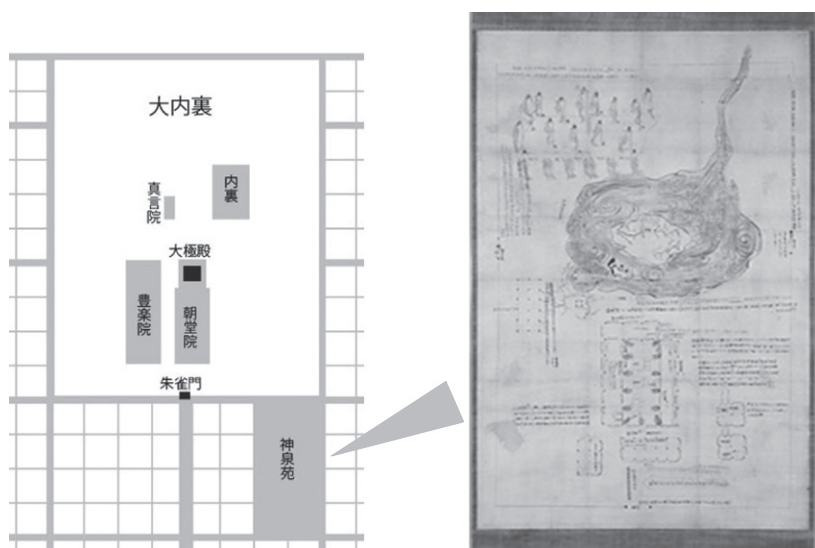


図版①：堀河院指図（太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987 による）

「里内裏」の機能もあらかじめ期待されていた（図版①参照）。

一方、「池」はどうかといえば、紫宸殿の南庭に、池のしつらえはない。池は内裏の外側、さらには諸官庁の並び立つ大内裏の区画の外に立地する「神泉苑」の広大な敷地内に囲い込まれて、帝王のプライベートな遊興の地としての役割を担っていた。もともと帝王が主催するのだから、それはおのずと半公的な性格を帯びざるをえない。神泉苑のその池には、龍頭鶴首の船が浮かべられ、公務を離れた帝王が、身近な親しい者だけを従えて、しばし憩うための詩歌管弦の遊びが、にぎにぎしく行われた（図版②参照）。

紫宸殿の「南庭」と、神泉苑の「苑池」との、この〈公〉と〈私〉を兼ね備えた点に「寝殿造り」の特質がある。晴れの儀礼の場



図版②：神泉苑請雨経法道場図（鎌倉時代・奈良国立博物館蔵）

としての〈表〉と、褻^けの遊興の場としての〈奥〉とに分節されたこの二つの機能を二つながらに取り込んで、有力貴族の邸宅としての「寝殿造り」は成立してくる。⁽⁵⁾

私たちのささやかな個人住宅にあっても、必ずや、公と私、晴れと褻、表向きと奥向きとの空間の使い分けはされている。そうした中、私的な究極の憩いの場を求めるとするならば、その中心には、どうしたって水辺の空間を模した「池」がなくてはならない。そうしたぜいたくは望むべくもないのだが、当時の発想からすれば、おのずとそうなる。

かくして「池亭」という空間概念が、白楽天の詩句に見える「活計は縦ひ貧なりとも潔く淨し、池亭は小なりと雖も幽に深し」（『偶吟詩』）や『裴相公の興下の池亭に宿る』などの用語例に導かれて、あらたに切り出されてくる。それを享けてであろう、嵯峨天皇に、「避暑の時に来り問ぬる院の裏、池亭に一つ把る釣魚の竿」（『凌雲集』所収「夏日左大将军藤冬嗣閑居院」）などの用例

のあることに注意したい。こう見てくると「寢殿造り」それ自体が、一個の巨大な「池亭」だったと言えなくもないのだが、「池亭」での、そうした悠々自適の閑雅な暮らしを、漢詩文の表現形式の一つである「記」のスタイルを借りて描き出したのが、『池亭記』と名付けられたいくつかの作品で、平安中期の漢学者、よしげのやすたね慶滋保胤によって書かれた文章がよく知られている。だが保胤の『池亭記』は、鴨長明の『方丈記』の成立に影響を与えたことで一般に知られるのであって、その文脈を離れては、ほとんど評価されてこなかった。ましてやそれに先立つて、みなもののかねあきつ源兼明によって書かれた同名作品があることなど、いったい誰が知ろう。

なぜそうなってしまったのか。近代国民国家の創設にともなう文化政策として「国文学史」が構想され、漢学者と国学者との間で熾烈な主導権争いが、明治の初めになされた。結果国学者の側が勝利して、民族の独自性を重きを置くドイツ文献学の積極的な導入などもあり、外来文化とみなされた漢詩文は、日本文学史の中でま、子あつかいの傍系に追いやられてしまった。かくして初等・中等教育の現場では、『万葉集』や『源氏物語』、『平家物語』や『徒然草』などの仮名文テキストが、民族の独自性を裏付ける価値ある古典として文学史のメイン・ストリームを形成する。⁽⁶⁾漢詩文の出る幕は、もはやそこにはない。他方「漢文」科目で扱われるのは、正統的な中国の古典漢詩文であって、日本で制作された和製漢文は、そこでも異端・傍系のあつかいだ。

日本と中国との、二つの言語文化のはざまに落ち込んで、どちらからもつまはじきされ、正当に評価されることのない日本漢詩文だが、少なくともそれを正面からまともにあつかってくれるのが、日本思想史の領域だ。しかし思想史の研究者は、記述内容についてあれこれ評価しこそすれ、その表現形式についてはほとんど頓着しない。宗教的な教義や思想の表明、さらには歴史叙述のあり様でさえもが、すべて言語表現に依拠しており、それ

に左右されざるをえないというのに。日本思想史の領域では、そもそも個々のテキストを、広義の「文学」（「文章」の学）としてあつかおうとする発想がないのだ。⁽⁷⁾

そうした趨勢にあらがって、本書では、源兼明の『池亭記』に始まる平安時代の「記」の作品のいくつかを、これから系統的にあとづけていく。第一章で述べたように、仮名文であれ漢文であれ、古代都市平安京の空間的なひろがりの内（洛中）に、あるいはその周縁にひろがる郊外地（洛外）にしかるべき場所を占め、邸宅を構え、「住まう」ことを主題とした点に着目し、それぞれの文章の継承関係をたどっていくこととする。

よはひ 齡半百なり―五十の声を聴くとき

「池亭」の空間特性が、私的な憩いの場にあつたとして、源兼明の『池亭記』から慶滋保胤の『池亭記』へ、さらには土御門通親の『擬香山模草堂記』から鴨長明の『方丈記』へと至る一連のテキストを、系譜的に結びつける指標となるのが、どのテキストにも見てとれる、五十歳の年齢表示だ。

源兼明は『池亭記』で、「如今老に垂として病根漸く深く、世情弥浅し。〈中略〉位三品にして、齡半百なり」と記し、その執筆動機を明らかにする。天徳三（959）年のこの年、正三位中納言の地位にあつた兼明は、まだ四十六歳だったが、四捨五入すれば確かに五十だ。源兼明が『池亭記』を書くにあたって、その先蹤のひとつと仰いだ白樂天の『草堂記』は、江州（江西省）司馬に左遷され、はるか遠くのミヤコ長安に思いをはせつつ、不遇の内に「草堂」を営んだ経緯を記したものが、元和十二（817）年のその年、白樂天はちょうど四十六歳と

なっていた。その年齢をたぶんに意識してか、兼明もまた四十六歳となったのを契機に『池亭記』を書く。

「^{よはひ}齡半、百なり」とある兼明のその記述を受け、慶滋保胤の同名作品『池亭記』は、「^{われ}予、^{かうねんちや}行年漸く五旬に垂^{なんなん}として、^{たまたま}適小宅有り」と記す。鴨長明『方丈記』もまた、「すなはち、五十の春を迎へて、家を出て世を背けり」と記す。土御門通親の『擬香山模草堂記』は年齢表示を欠くが、白楽天の『草堂記』をなぞらえたそのタイトルからして、五十の声を聴いて起草されたことは明らかだ。以上を要するに、その筆者が、五十歳の年齢を意識したとき、終のすみかを求めてこれら一連のテキストは書かれてくる。

五十という年齢は、では、彼らにとつて、どのような意味を持っていたのか。コロナ禍にもかかわらず、日本人の平均寿命はさらに延びて、二〇二一年には女性が約八十八歳、男性が約八十二歳となった。いよいよ人生一〇〇年時代に突入しそうな勢いだ。そうしたなかにあつて、五十歳などまだまだ人生半ば、これからの将来、相変わらず先行き不透明なまま、迷い多き日々を生きて行かねばならない年齢の位置づけにある。

だが当時は違っていた。「五十にして天命を知る」（『論語』為政篇）とあるように、五十歳の年齢は、この世での自己に与えられた役割もおおむね定まり、迫りくる〈死〉のときを多分に意識して、人生の幕引きを考える時期に当たっていた。『建てること、住むこと、考えること』の文章のなかでハイデッガーが、生死を分ける空間の事例として「橋」を挙げていたように、五十の声を聴くとき、ようやく五感が不調を訴え、からだのあちこちに不具合を生じて、その生体機能がONとOFFとの間で点滅し始める。この世界の内に投げ入れられ、特定の場所を占めて存在するおのれのからだ、その容れ物としてある世界のひろがり、との実存的な関係を、次第と意識しはじめ、たとえて言えば終のすみかとしてのおのれの墓所を求めることとなるのだ。白楽天に始まり、鴨

長明の『方丈記』へと至るテキストの系譜が、そのことを指し示している。

実際のところ、元服して十代の半ばで結婚し、子を産み、育て、その死没年が記録に残る貴族層でさえ、三代、四十代で人生を終えている事例は珍しくない。当時にあつては、五十歳まで生きながらえたそのことだけで、慶賀すべきことだった。だとすれば、「六条院」をその舞台として、主人公光源氏の兄朱雀院の、五十の賀の準備を背景に繰り上げられる『源氏物語』『若菜上・下』の長大な巻（若返りのための回春の縁起物として五十の賀に供されたのが「若菜」であつた）も、こうした「記」の作品の一連の系譜に足し加えていい。さらには五十の年齢を中に挟んで、四十歳にしかない夫の右衛門尉に、六十歳の老妻を配することで、なんともアンバランスな夫婦関係を、滑稽な筆づかいで描いてみせた藤原明衡の『新猿楽記』も、この系譜に足し加えてよい。

本書であつかうすべての役者が、こうして出そろつた。先に見たようにこれら一連のテキストのトリガーの役割を果たした源兼明の文業（＝文章の営み）を、まずは見ていくことから始めよう。

模倣の系譜―源兼明から光源氏へ

源兼明は醍醐天皇の第十六番目の皇子として生まれ、臣籍降下して初めは源氏姓を名乗つた。漢学の素養にすぐれ、村上天皇の皇子で同じく漢学の才で知られた「後中書王」具平親王（兼明にとつては甥に当たる）と対比され、「先中書王」と呼ばれた人物である。腹違いの兄弟に、「安和の変」（九六九年）で失脚した、あの左大臣源高明がいた。事が起こつた際には兼明も連座して、殿上の札を削られ、一時昇殿を止められるというこ

とがあった。しかしその後復帰して、最終的には兄高明と同じ左大臣の地位にまで昇りつめる。

しかし晩年に、もう一波乱あった。摂関の地位をめぐる藤原兼通、兼家兄弟の権力争いのあおりを食い、皇籍復帰を迫られて、中務卿の閑職へと追いやられたのだ。このとき以後、呼称は「源兼明」から「兼明親王」へと変わる。中務省の唐名を採って、「中書大王」の名でも呼ばれた。⁽⁸⁾

兼明が親王への皇籍復帰を強いられた貞元二（977）年の時点で、公卿たちの年齢構成を見てみよう。六十九歳の中納言文範を除けば、兼明はその時、最高齢の六十四歳。兼明が抜けたあと、代わって左大臣の地位についてのは藤原頼忠（小野宮流）で五十四歳、大納言から右大臣に転じた雅信は五十八歳、事を仕掛けた張本人の関白藤原兼通（九条流）はまだ五十三歳で、しかもその年の十一月には病状が悪化して死去してしまう。⁽⁹⁾ それだけではない。親王の子息の源伊陟が、その同じ年、蔵人頭左兵衛督から参議に転じて、新たに公卿の列に加えられている。関白兼通による強引な人事というだけでなく、世代交代の意図もあったことを考慮すべきだろう。だが親王自身の意識としては、この一方的な人事を、自己の意に沿わない不本意なものとして受け止めたようで、その憤懣やるかたなき思いを、代表作『菟裘賦』において吐露することになる。

以上、見てきただけで、ある連想へと導びかれる。天皇の皇子として生まれながら、臣籍に降下して源氏姓を名乗る。途中、左遷の憂き目に合うような危機的状況を乗り越え、やがて晩年に至り、再び皇族へと返り咲く。そう、『源氏物語』の主人公光源氏のそれと、よく似ているのだ。晩年といっても光源氏の場合は、まだ四十歳になるかならないかのころだが、大きく三部に分かれる物語の、第一部の最後にあたる「藤裏葉」の巻において、光源氏は准太上天皇の地位を与えられ、以後、「院」と呼ばれる。人生、はやばやと「生き急ぐ」の感、なきに

『源氏物語』における主人公の年齢と対応する巻々		
第1部	光源氏	桐壺・簪木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・花宴・葵・賢木・花散里・須磨・明石・霽標・蓬生・関屋・絵合・松風・薄雲・朝顔・少女・玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱・梅枝・藤裏葉
	0歳～39歳	
第2部	光源氏	若菜上・若菜下・柏木・横笛・鈴虫・夕霧・御法・幻
	39歳～52歳	
第3部	薫	匂宮・紅梅・竹河・橋姫・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋
	14歳～28歳	

図版③：『源氏物語』巻構成

*太字は、当該論考の中で触れた巻名を示す。

しもあらずだが、その晩年（といってまだ五十歳になったばかりのところである）、「幻」の巻が語られてのち、光源氏は嵯峨の地に隠棲する。この嵯峨への隠棲に関しても、後述するように兼明親王の姿が重ね合わせに見てとれる（図版③参照）。

明石のトボス

六条京極の地に広大な「河原の院」を造営した源融みなもとのとあや、作者紫式部が仕えた中宮彰子の父藤原道長などの名が、光源氏のモデルとして挙がっている。いままで見てきた経緯からして、そうしたモデルの一人に、新たに兼明親王の名を加えておかしくない。それどころか、作中にも実際に、その名が見えている。

光源氏が須磨から明石の地へと退去した際、その源氏を婿に迎え採ろうと意図した明石の入道は、「明石」の巻で、箏そうの奏法にことよせ自分の娘を紹介する⁽¹⁰⁾。

なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること四代になんたり侍りぬる

を、かうつたなき身にて、この世のことは捨て忘れ侍りぬるを、物の切にいぶせきをりをりは掻き鳴らし侍りしを、あやしうまねぶものの侍るこそ、自然にかの先大王の御手に通ひて侍れ（この私は、延喜の帝の御手から箏の奏法を弾き伝えますこと四代にあいなりますが、このようにふがいない身の上とて、宮廷社会の動きとは一切縁がなくなってしまうかもしれませんが、気分のことさら滅入る折には、ときおりかき鳴らしておりましたところ、それをどうかして真似する娘がおりますが、これがなんと、おのずから先大王の御手筋に似通っておるのでございます）。

「先大王」とあるところ、現行の注釈書の多くが延喜の帝（醍醐天皇）か、もしくはその皇子を指すとする。だがこれは、明らかに「先中書王」の名でもって呼ばれた兼明親王のことを言ったものに違いない。というのも、のちの「松風」の巻に、明石の君にとっては母方の曾祖父に当たる人物のこととして、次のような記述が見えるからだ。⁽¹⁾

むかし、母君の御おほじ、中務の宮と聞こえけるが領じ給けるところ、大堰川のわたりにありけるを、その御のち、はかばかしうあひ継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人を呼びとりて語らふ（昔、明石の君の母君の御祖父、中務宮と申し上げた方の領有しておられた所が、嵯峨の大堰川のあたりにあったのだが、そのご子孫でまともに相続する人もおらず、幾年来ひどく荒れるがままになっているのを父入道は思い出して、中務宮が住まわれていたところから引き継いで管理人の

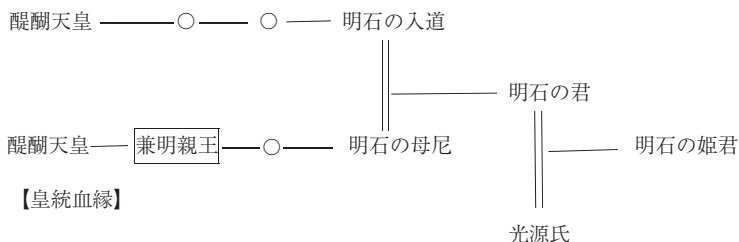
ような役割を担っている者を呼び寄せ、明石の君が上京した折の宿所とする相談をもちかける。

この「中務の宮」を、中世の源氏注釈書である『河海抄』や『花鳥余情』は、あやまらず兼明親王のことだと指摘する。兼明親王は晩年、ミヤコの西北郊、大堰川のほとりに山荘を構え、その地に隠棲した。そのことを踏まえ、この記述がなされたであろうことは、極めて蓋然性が高い。

罪を許されて、明石の地からミヤコへと帰還した光源氏は、「松風」の巻において、本邸である「二条院」の隣にあらたに土地を求め、「二条東院」の造宮に着手する。そして、明石の君との間に儲けた姫君をそこへと迎え取るべく、明石の君の上京を促す。本邸の「二条院」には光源氏最愛の女性であった紫の上が住まいする。それとの棲み分けを考慮した措置だけでない。みずからの血を引く幼い姫君を、ミヤコから離れた僻遠の地に、このまま埋もれさせておくわけにいかないからだ。だが田舎育ちに引け目を感じる明石の君は、ミヤコのご真ん中の一等地に造られたその「二条東院」へと、すぐさま入ろうとはしない。まずはミヤコから遠く離れた嵯峨の大堰の地に、母方の曾祖父に当たる「中務の宮」の旧跡を求め、そこをとりあえずの「住まい」と定める。

いささかもってまどろっこしい、『源氏物語』のこの設定は、いったい何を意味するのか。ミヤコ世界とヒナとの二項対立において、明石の地はヒナの側にあって、常に劣位の位置づけにある。「落標」の巻に描かれた住吉詣の際の出会い（というか出会いぞこない）で、そのことをいやというほど思い知らされた明石の君であった。ならばこれは、ミヤコ世界を体现する光源氏に対し、おのれの矜持を保つべく選び取られた明石の君の側からの、ささやかな抵抗なのだ。しかもその際に、母方の曾祖父として、兼明親王の名が呼びだされている点に注意した

【彈箏伝授】



図版④：明石君父方母方系譜

い
(図版④参照)

明石の君は 先に見たようにその父方の系譜をたどれば、父明石入道による箏の奏法を通じて醍醐天皇へとたどりつく。母方の血筋をたどれば、曾祖父の兼明親王を介して、同じく醍醐天皇へとたどりつく。ミヤコ世界ではすでに失われた古き良き楽の音の文化伝統が、箏の奏法と、皇統につらなる血脈との双方に支えられ、五畿内をはずれた僻遠の地とでもいうべき、ここ明石において、ささやかなたちで伝えられ、息づいているとの見立てであらう。それが証拠に、「明石」の巻ではこんなやりとりが、光源氏と父明石入道との間でなされていた。⁽¹²⁾

嵯峨の御伝へにて、女五の宮（醍醐天皇皇女勤子内親王）、さる世の中の上手に物し給へるを、その御筋にて取り立てて伝ふる人なし。すべて、ただいま世に名を取れる人々、かきなでの心やりばかりにのみあるを、ここ（明石）にかう弾きこめ給へりける、いとけうとかりける事かな（嵯峨の帝のご伝授によつて、女五の宮の勤子内親王がその当時の名手でいらつしたのですが、そのお血筋の中にはこれといつてその奏法を伝える人もありません。総じてただ、当今の世に上手の名を馳せている人々が、みなうわすべりの気晴らし程度でしかないのに、こちらではこうしてみごとな奏法をお伝え

になつておられるとは、たいそう貴重なことです。

この言葉を受け、明石入道の奏でる箏の音は、「いまの世に聞こえぬ筋弾きつけて、手づからいという唐めき、ゆの音深う澄ましたり（今の世には聞くこともならぬ典雅な奏法を身につけていて、手さばきもたいそう由緒正しく本格的で、揺の音色を深く透きとおるように弾いている）」と、光源氏の耳を通して絶賛されている。

実のところ以上のような状況設定は、白楽天の『琵琶行（琵琶引とも）』を換骨奪胎するかたちで構想されたものと思われる。広州司馬に貶されて配所へと向かう船中で、かつてミヤコ長安でもてはやされ、いまは年老い、落ちぶれて、地方をさすらう妓女（女芸能者）の悲しげな琵琶の音を耳にし、それと自己の境遇とを重ね合わせ、白楽天は涙する。⁽¹³⁾ 対するに『源氏物語』で明石入道は、琵琶法師よろしく今まで弾いていた琵琶のことを、箏のことに持ち替え（ことは当時の弦楽器の総称である）、光源氏の前で弹奏する。ここ明石の地は、光源氏にとって「配所」でもあった。

摂津の国の須磨はまだ畿内だが、播磨の国の明石は山陽道に属し、律令官人が許可なくそこへと越境するのは法的に許されない。光源氏はこのとき無位無官だからよいというわけでもない。明石つながりで、罪なきあかしを得るとの語呂合わせも考えられなくはない。だがそれはともかくとして、ことほど左様に、『源氏物語』においても白楽天の影響は甚大なのだ。

ところで、ここにあらたに嵯峨天皇の名が挙がっているのに注意したい。醍醐天皇どころではない。さらに系譜を過去へとさかのぼらせ、明石の地にかろうじて伝えられた箏の奏法の、嵯峨天皇に起源する（「正統」の流れ

が、物語のなかで誇らしげに言挙げされているのである。父入道から奏法伝授を受けた明石の君がその唯一の後継者としており、娘の明石姫君（のちの明石中宮）が、やがてそれを引き継ぐ。

嵯峨のトポス

『源氏物語』における明石の地は、白楽天の『琵琶行』に依拠しつつ、兼明親王と骨がらみで、意図的な設定がされていた。では親王と明石とは、どこでどう結びつくのか。

流謫の地とされる須磨の地で在原行平が詠んだ、「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」（『古今集』雑下）の歌を踏まえて「須磨」の巻の構想されたことは、よく知られている。それと同じに兼明親王も、かつて地方官（播磨権守）として現地に赴いたことが、『和漢兼作集』に採られた親王の歌、「をぐら山かくれなき代の月かげにあかしの浜を思ひこそやれ（小倉山に隠れることなく明るく輝きわたる月のような優れた帝王の代にめぐりあって、むかし暮らした明石の浜を思い出さないではいられない）」から知られる。それへの応答責任を果たすかのように、『源氏物語』の「松風」の巻では、大堰の山荘へと移り住んだ明石の君とその母の感慨が、次のように記されることとなる。¹⁴

家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心ちもせず、むかしのこと思ひ出でられて、あはれなること多かり（大堰の山荘の構えも風情があり、長年過ごしてきた明石の海辺に似て

いるので、住処の変わったような感じもしない。中務宮の住まわれていた当時が思い出されて、しみじみとした思いをそえられることが多い。

嵯峨野の一角、小倉山のおもとに設けられた山荘から、はるばる眺めやる大堰川の広々とした流れに、向かいに淡路島をへだてて激しく逆まく明石海峡のイメージを重ね見る、双方の言葉遣いの共鳴関係に注意したい。

兼明親王が大堰のこの地に念願の山荘を設けたのは、『源氏物語』の書かれた時期より三十年ほどさかのぼる天延三年（975）のこと。ときに親王六十二歳。その際の手放しの喜びようが、無邪気ともいふべき筆致で、『祭龜山神文』^{（15）}に述べられる。「昔式師將軍（＝李弘利の故事をいう）佩刀を抜いて山を刺ししかば、飛泉湧き出で、戊巳校尉（＝耿恭の故事をいう）衣冠を正しくして井を拝せしかば、奔流激射す」とあるように、その趣旨は、山荘へと水を引く鑓水のしづらえ（先にも見たようにプライベートな空間には「池」のしづらえが欠かせないからだ）を造作する上で、大地に人為的な手を加えることへの許しを、龜山の土地神に請うというもの。言ってみれば地鎮祭のとき読み上げる祝詞^{（のりこと）}みたようなものだ。だがこの文章で注目すべきは、「兼明、年齢衰老して、漸く休憩せんと欲ふ。爰に先祖聖皇の嵯峨の墟を尋ね、地を栖霞觀に請ひ、この靈山（＝龜山をいう）の麓を占む」との文言のあることだ。鴨長明の『方丈記』は福原遷都について触れた文脈で、「此の京のはじめを聞ける事は、嵯峨の天皇の御時、都と定まりけるよりのち、すでに四百余歳を経たり（平安京の始まりは、嵯峨天皇のご治世にここがミヤコと定められてよりのことと聞いているが、それからすでに四百年あまりを経ている）」と記す。当時一般の認識として、平安京の創始者は桓武天皇ではなく、嵯峨天皇だった。その嵯峨天皇が、

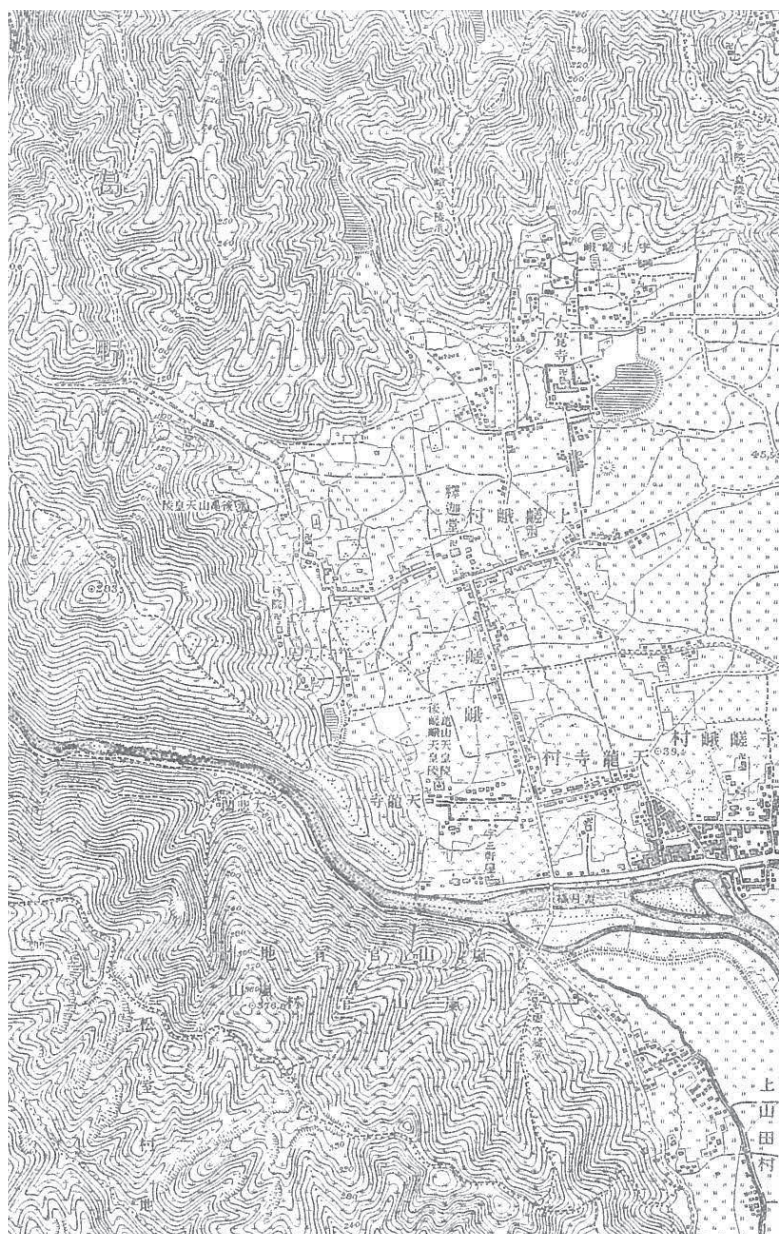
退位後に隠居所として選んだのが、ミヤコの西北、乾（戌亥）の方角に位置する、ここ嵯峨の地だった（図版⑤参照）。

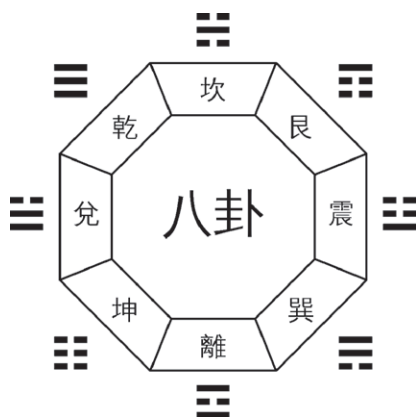
周易八卦では、乾（戌亥）は、〈地〉の方角にあたる坤（未申）と対峙して、〈天〉の方角にあたる。「嵯峨」とはそもそも険しい山の形容で、実際にも「嵯峨山」と名付けられた山が中国陝西省にある。それにちなんで、天空により近い神仙世界のイメージから名付けられた、いかにもらしい中国風の地名なのだ（図版⑥参照）。ミヤコから見て〈天〉の方角に当たるこの嵯峨の地に、嵯峨天皇の陵墓は定められた。天皇の諡号もそれに由来する。自らの創始した平安京を、神仙世界のはるかの高みから見守る守護神たろうとしたのだろう。平安末期の漢学者大江匡房の編纂になる『本朝神仙伝』は、神仙世界へと転生を果たした本朝の人々の伝を集めたものだが、残念ながら嵯峨天皇の伝はそこない。代わりに「河原院大臣の侍」の伝がある。父の意向を受け、左大臣源融もまた神仙世界の住人たらんことを願ったのであろう、この地に晩年「栖霞観」を営んだ。それらの先蹤をたぶんに意識してか、『祭龜山神文』の文言が示すように、兼明親王もまた、この地に山莊を設けることとした。

だが、その文言からうかがい知れるのは手放しの喜びばかりで、この地が抱え持つある種の〈翳り〉に、なんら頓着することがない。ただひたすら無邪気に、明るいのだ。嵯峨の地が抱え持つ〈翳り〉とは、ではいったい何であるか。「嵯峨太上天皇遺詔」なる文章が、『類聚国史』承和九年（八四二）七月十五日条に収められていて、そこにこんな文言が見える⁽¹⁷⁾。

故に万機^{ゆゑ}の務^{つとめ}を以て、賢明（＝淳和帝）に委ぬ。一林の風、素心^{もとよりこころ}愛するところ。位^{くらゐ}無く号^{なづけ}無く、山水^{いたり}に詣

図版⑤…陸軍測量局・明治二十二年作成二万分之一仮製地形図「愛宕山」部分





図版⑥：文王後天八卦図

て逍遙^{がうき}、事無く為^な無く、琴^{こと}と書^{ふみ}とを玩^{もてあそび}て以て澹泊^{たんぱく}することを思^{おも}ひ欲^{ねが}い。

弘仁十四年（八二三）十月、異母弟で同い年の淳和天皇に譲位して、嵯峨天皇は太上天皇の尊号を与えられる。死に臨んでその折のことを振り返っての、これは「遺詔」の一節なのだ。だが譲位後も長らく皇室の家長として宮廷社会に君臨しつづけ、それが災いして嵯峨の死とともに、たちまち「承和の変」（八四二）が出来る。台頭著しい藤原氏に対抗し、宮廷社会を二分していた大伴氏や橘氏などの旧勢力が、この政変により排除される。

おそらく、それあることをあらかじめ見越してであろう、ミヤコの政局から一切手を引き、山深い僻遠の地に身を隠して、孤独の内に詩歌管弦の遊びに徹する暮らしを望みながら、譲位してのちもそれをなしえなかった自己のふがいなさを、一触即発の緊迫した政治情勢のもと、深く憂慮するという趣旨のものであった。

「嵯峨の隠君子」とは何者か？

なんとも奇態な「嵯峨の隠君子」伝承が、ここから発する。⁽¹⁸⁾謎の人物「嵯峨の隠君子」について、大江匡房の談話集『江談抄』には、二箇所に記事が見える。まずひとつ目の巻五の六四話「広相左衛門尉に任ぜられ、是善卿許されざる事」と六五話「隠君子の事」と題された

一連の話は、次のようなものだ。⁽¹⁹⁾

また云はく、「広相左衛門尉に任ぜらる。是善卿この事を許されずと云々。菅家（＝菅原道真のこと）献策の時、省（＝式部省のこと）の門に来たる。かの時、強ちに小屋に籠らず、ただ省の門を徘徊す。広相、毛杵を着きてこの処に到り、微事（＝試験問題のこと）の処々を相共に披きて勘ふるに、一事通ぜざる有り。広相、馬を策ちて嵯峨の隠君子の許に到りて問へり」と云々。

問ひて云はく、「隠君子の名はいかん」と。

答へられて云はく、「淳か」と。字談られず。本を見るべし。嵯峨源氏の類か。〈下略…以下話題は当時の漢学者の優劣比較の話に移る〉

『江談抄』はその名が示す通り、平安末期の院政期、権中納言の公卿の地位にまで昇った大江匡房晩年の談話を、弟子の藤原実兼が問答体形式で筆録したもので、漢学者の逸話を多く伝える。文中に見える「是善卿」は、菅原道真の父是善（極官は従三位参議刑部卿）のことで、橘広相はその弟子に当たる。漢学出身でありながら、弟子の広相が武官の左衛門尉に任官したことを、師の是善は不服としたのであろう。だがそれが幸いして、子息道真が「対策」の試験（そのときの出題者は是善のライバル都良香だった）の答案作成に窮した際、「嵯峨の隠君子」に助言を乞うため嵯峨まで馬を飛ばし、広相が一役買ったという話だ。

「嵯峨の隠君子」とは、いったい何者か、その名を教えて欲しいとの実兼の問いに、匡房は「たしか淳だった

か」と答える。中国かぶれの嵯峨天皇は、自分の子息すべてに中国風の一字名を名乗らせた。その嵯峨の五十人におよぶ皇子・皇女のなかに、「淳（あつし、きよし、ただし、まこと等の多様な訓が考えられる）」を名乗る人物が、確かにいる。この「淳」なる人物、親王の列に加えられるでもなく、臣籍降下して源氏の姓を名乗るのもなく、「王」という中途半端な地位に、終生とどまった。

この「淳王」、先の道真の逸話からも知られるように漢学の素養にすぐれ、白楽天と親しかつた中国の詩人元稹と、時空を超えて交友関係を取り結んだとも伝えられる。いまひとつの『江談抄』巻四の五十八話には、『和漢朗詠集』（編者は藤原公任）の「菊」題に採られて当時の平安人士にはよく知られた元稹の句、「これ花の中に偏に菊を愛するにはあらず、この花開きて後、更に花のなければなり」における用字の誤りを、霊媒（憑りまし）を介してではあるが、元稹みずから糾したとの話が採られている。⁽²⁰⁾

隠君子、琴を鼓く時、元稹の、霊人に託きて称ひて曰はく、「件の詩、「開尽」なり。「後」の字、しかるべからず」と。

あるいは謂はく、「嵯峨の隠君子、この詩を吟じ琴を弾くに、天より糸のごときもの下り来りて云はく、「我自らこの句の貴きを愛す」と。その霊、宿執有るに依り、琴を聞きてその感に堪へず」と。

天より下ってきた「糸のごときもの」は、おそらくササガニ（蜘蛛）であろう。⁽²¹⁾「アリアドネの糸」よろしく、蜘蛛は古来より、神仙世界と交信する媒介者の役割を担っていた。ここではそれが、当時としては希少価値とさ

れた「琴」の弹奏によりもたらされた奇瑞ととらえられている点に注意したい。

先に見た光源氏と明石入道との箏の奏法をめぐるやり取りのきっかけは、無聊をかこつ光源氏が、ミヤコより携えた琴のことを奏でたことにあった。それに対してここでは、中国伝来の「七絃琴」の奏法に秀でていたことが、隠君子の属性として言われている。七絃琴を含めた器楽の、日本での文化的受容については、上原作和『光源氏物語學藝史―右書左琴の思想』や、西本香子『古代日本の王権と音楽』などに詳しい。『源氏物語』では、この七絃琴の奏法を伝える名手として、主人公光源氏が位置づけられていて、皇族の籍を抜かれ、臣籍に降下した光源氏の、その皇統としての〈正統性〉を、器楽の奏法を通して遠回しに保証する設定ともなっている。「琴」の奏法を介した「嵯峨」の地との結び付けが、ここにも見て取れるのだ。

「嵯峨の隠君子」についてはまた別に、奇妙な言い伝えが残されている。平安末期の院政期、宮廷社会の人々の動きを跡づけた歴史物語の『今鏡』（先の『江談抄』よりさらに六十年ほど後の成立）は、その「志賀のみそぎ」の章において、生まれたときから眼があかず、しかも病弱で、幼くして亡くなった鳥羽天皇の第二皇子のことに言及する。生母は、白河上皇の秘蔵つ子であつた待賢門院璋子。ついで生まれた第三皇子もまた、全身がなよなよとして足腰立たず（それゆえなよ君と呼ばれた）、口も利けぬまま十六歳まで生きながらえて、最期は出家の体裁をととのえて亡くなった。これら夭折の皇子たちの先行事例として「嵯峨の隠君子」の名を挙げ、『今鏡』は次のように記す。

嵯峨の帝の御子に、隠君子と申しける御子は、御み身にいかなることのおはしけるとかや、さて嵯峨に籠り

居給ひて、引きもののうちに垂れ籠めて、人にも見え給はで、童にてぞおはしける。このころならば、法師にぞなり給はまし。昔はかくぞおはしける。心もさどく、いとまおはするまに、よろづの文を抜き見給ひければ、身の御才、人にすぐれ給ひておはしけるに、やんごとなき博士の道を（菅原道真が）とげ給ひける時（下略…先に見た『江談抄』巻五の六十四の逸話が以下に続く）。

（嵯峨天皇の御子で、隠君子と申しあげた御子は、お体に障害がおりになられたとか。そこで嵯峨に籠居なさって、帳などの中にとじこもって、人にもお逢いなさらないで、元服もしないままでいらつしやいました。もし今の世ならば、法師になられるでしょう。昔はこのように隠棲なさいました。聡明で、自由な時間があるのにまかせて、万巻の書物をお読みなされたので、御学才も人よりすぐれていらつしやったため、菅原道真がかつて、なみなみでないすぐれた博士となるための方略試を受験されたとき…下略）。

この記事には混同がみられ、その名の由来を父嵯峨天皇の人名に求めるか、隠棲した場所としての地名に求めるかで、どうやら人物がふたとおりに考えられる。嵯峨天皇の皇子の「淳王」とは別に、醍醐天皇の子として『本朝皇胤紹運録』に名の挙がる親王十六人、内親王十六人、賜姓源氏六人（その内に高明や兼明の名も見える）の総計三十八名の系図のその端に、三十九番目の子として「童子」とだけある人物がそれだ。どうしたわけか名前すら記されず、手がかりは傍らに「号けて嵯峨の隠君と云い。白髪にして童形と云々」と注記される、ただそれだけだ（図版⑦参照）。

「白髪にして童形」という、語義矛盾もはなはだしいその記述は、元服加冠の式（成人儀礼）を行わず、童名

英子内親王 母同長明一	〔頭〕要記。英子内親王。天曆九年九月十六日薨。廿六
源高明 左大臣。正二。兼車。號三西宮左大臣。安和二	〔頭〕紀略。天元五年十二月十六日。前太宰權帥正二位源
源自明 三木正四下右兵督	〔頭〕補任。天德二年。參木正四位下源自明四月十七日卒。
源允明 從四上。播磨守	〔頭〕皇胤系圖。源允明。母左兵衛佐源敏相女。要記。允明。
源爲明 正四下。刑部卿	〔頭〕要記。爲明。應和元年六月廿一日卒
源兼子 從四下	〔頭〕要記。兼子。天曆三年薨
源殿子 母同三時明一	童子號三嵯峨隱君子。白髮童形云々
廣平親王 三品兵部卿。天祿二二九薨	〔頭〕紀略。天祿二年九月十日。兵部卿三品廣平親王薨。年
二十二	二十二

図版⑦：『本朝皇胤紹運録』（群書類従）に見える「童子」

のまま年老いて、髪の毛が白くなってしまったことを伝え
ているらしい。「このころならば、法師にぞなり給はまし」
と『今鏡』が述べるように、隠棲といえ、たいていは仏
教のそれを思い浮かべる。だが中国文化の影響色濃い平安
の前期では、儒教思想にもとづく閑適の生活や、道教思想
にもとづく隠逸の暮らしの方が一般的であった。

それにしても、とばりの内に身を隠し、おかつば頭の童
子姿のまま、人との交わりを絶って学問と音楽の内に孤独
の寂しさをまぎらす生活とは、いったい、いかようなもの
であったか。「御み身にいかなることのおはしけるとかや」
との『今鏡』の、おぼめかした言い回しからは、何かしら身
体的な障害をかかえていたか、あるいは人々から忌み嫌わ
れた例のやまいに罹患していたかのようにも読めてしまう。

流謫の地としての嵯峨

先にも見たようにミヤコの乾（戊亥）に位置する「嵯



図版⑧：住吉弘尚筆『酒呑童子絵巻』（根津美術館蔵）

峨」の地は、周易八卦でいう〈天〉の方角にあたり、天空により近い神仙世界のイメージでとらえられていた。だからこそ嵯峨天皇は、みずからの隠居所をこの地に求めた。今の大覚寺がその場所で、陵墓も裏手の山上に定められた。父祖伝来の聖地となったこの地に、「嵯峨の隠君子」もまた隠れ棲んだ。だがそこは、人目を避けてその身を隠さねばならない、なにかしら後ろめたい〈翳り〉を宿す場所でもあったのだ。もしかして、ミヤコの西北郊、大江山（＝老いの坂峠）に巣くう妖怪として人々に恐れられた、あの「酒呑童子」説話の原型を、この「嵯峨の隠君子」の姿に求めることができるかもしれない（図版⑧²⁵参照）。

だがことの解明は、別の機会に譲るとして、兼明親王が隠居所として嵯峨野の一角大堰の地を選んだのも、父祖伝来の聖地として、嵯峨の地がイメージされていたからであろう。その際に起草された『祭亀山神文』からはしかし、先にも述べたように手放しの喜びようしか伝わってこず、〈翳り〉の片鱗もうかがい知ることができない。このことは、ミヤコの中でもとびきりの一等地、三条坊門南、大宮東に、南北二町を占めた広大な「御子左郎」^{みこひだり}（その邸宅名称は

左大臣にまで至った皇子に由来する）の邸内に、「市井の隠」を気取って「池亭」を設け、その際に親王が起草した『池亭記』の文章にも言えることであって、私的空間にまだ自足して、ミヤコの都市空間とかかわる明確な批評意識を、そこに見てとることはできそうにない。先蹤と仰いだ白樂天の、奥深い山中への隠棲を「小隠」、市中のそれを「大隠」とするのに対し、郊外地への「中隠」を最もよしとする思想⁽²⁶⁾、就中その発想の原拠となった『草堂記』が、江州（江西省）司馬に左遷され、ミヤコ長安の中央政界から遠く隔てられた疎外の意識を梃子に、不遇の内に「草堂」を営んだ経緯を記したものであったことに比して、その能天気ぶりが一層際立つ。

だが、嵯峨に山莊を営んだ二年後、親王は左大臣にまで至った公卿の地位を剝奪され、皇籍復帰を迫られて、中務卿の閑職へと追いやられる。事実上の左遷である。このときようやく、『草堂記』の文言に込められた白樂天の鬱屈した思いが、加えて嵯峨の地に揺曳する「嵯峨の隠君子」の、その〈翳り〉を帯びた生活のありようが、身をもって実感されたに違いない。

かくして代表作『菟裘賦』が書かれてくるのである。そこに示されたあからさまな政権批判は、ミヤコから離れた西北郊、易でいう〈天〉の方角に位置する嵯峨の地に、嵯峨天皇以来累積されてきた文化伝統ゆえ、はじめて可能となった表現であつたろう。冒頭は次のように書きだされる⁽²⁷⁾。

余、龜山の下に、聊か幽居を卜して、官を辞し、身を休し、老を此に終へんと欲ふ。草堂の漸く成りぬるに逮びて、執政者に、枉げて陥れらる。君昏く、臣諛ひて、翹ぶるに処なし。命なるかな天なるかな。

当代の帝王（円融天皇）や、関白藤原兼通を名指しで批判した、「君昏く、臣諛ひて、慙ふるに処なし」の句が、ことのほか有名だ。しかし文脈の流れはいささか屈折している。まずは、「官を辞し、身を休し、老を此に終へんと欲ふ」と述べられているように、そもそも親王は、隠逸の生活にあこがれ、『池亭記』や『祭亀山神文』などの文章において、その理想の暮らしを、いままでさんさんに賛美し、謳歌してきたではないか。ならばその生活が現実のものとなった今こそ、これ幸いとそれを喜ぶべきではないのか。したがってこの文章も、「たまたま」とか、「幸いにも」の語をとまなつて、順接としてつながるべきものなのだ。なのに実際は、「執政者（＝関白兼通）に、枉げて陥れらる」と、逆接表現をとっている。

文脈の流れは冒頭からして屈折している。それがみずから主体的に選びとった隠逸の生活ではなく、外部から強いられ、押しつけられたものであったことへの異議申し立てを、いままさにこの文章を書くことによつて行うに際し、以下のような誤解の、読者のうちに生じることを、あらかじめ封じておく必要があつたのだろう。つまりはこうだ。六十四歳の高齢とはいえ、政務（俗事）に繁忙を極めるからこそ、それとの対比の中で、いつときそれから逃れるための隠逸へのあこがれであつた。日ごろ厭うていたその政務を取りあげられては、隠逸への想いもたちまち色あせる。ならば、今まで事あることにくり返してきた隠逸の生活へのあこがれなど、上つ面の観念的なお遊びにすぎず、実のところは、いまだ政務（俗世）への強い執着を残していて、それゆえに、この『菟裘賦』の文章を書いたのではあるまいかとの、周囲の誤った理解だ。序文はしたがって、はるか時間を隔てた後世の読者へ向け、間接的に訴えかけるかたちで、次のような文言へと続いていく。⁽²⁸⁾

後代の俗士、必ず我を罪するに其の宿志を遂げざるを以てせん。然れども魯の隠、菟裘の地を営みて老ひな
んと欲ひて、公子翬に害はる。『春秋』の義、その志を賛け成して、賢君となせり。後來の君子、若し吾を
知る者あらば、これを隠すなけん。

魯の隠公は政局を退いて菟裘の地に隠棲した。にもかかわらずその政治的野心を疑われ、謀殺された⁽²⁹⁾。『春秋
左氏伝』の伝える隠公の末路に、みずからをなぞらえ、異母兄源高明が「安和の変」でこゝむった左遷・流刑の
憂き目を、自分もまた見るようになったかもしれない当時の緊迫した政治情勢に、のちの読者の理解を求めている。
前年には二度目の内裏焼亡により、執政藤原兼通の私邸堀河院を「里内裏」として、円融天皇はそこに間借
りし、あたかも人質にとられたような状態に置かれていた(図版①参照)。兼通による政治の私物化には目に余
るものがあり、弟兼家との摂関家内部の確執を背景に、実際なにが起きてもおかしくない状況にあったのだ⁽³⁰⁾。

だからというべきか、続く『菟裘賦』の本文は、左遷の憂き目を見た幾多の先人たちの事例を漢籍文献に徴し
つつ、失意のうちに隠逸閑居の生活を強いられた、それら先人たちの想いに、限りなき共感を寄せる文章によつ
てつづれ織りされている。首陽山にのがれて蕨を摘んだあの伯夷・叔斉の故事(『史記』等に見える)に始まり、
陶淵明の「帰去来辞」の引用で終わる先人たちの生きざまにみずからをなぞらえ、それを紙上で模倣踏襲し、修
辞のレベルで真似てみせることに費やされるのだ⁽³¹⁾。

『菟裘賦』が後の人々にもてはやされ、絶賛されたのは、官途にあれば清廉をもってこれに努め(これを「兼
濟」という)、もし容れられなければ野に下り、隠逸の風雅に心遊ばせて、自らの憂愁の想いを慰めつつ(これ

を「独善」という）、再起のときを待つ、海彼のいわゆる教養読書人、士大夫層に特有の「独善」と「兼濟」の二つの生き方を一身に体现するかたちで、それを一篇の詩文の内に、見事に集約してみせたからだろう。⁽³²⁾その模倣踏襲のうちに、本朝に在っては少しも評価されず、所詮は絵にかいた餅でしかなかった律令官人としての理想像を、人びとは、ミヤコの西北郊、〈天〉の方角に当たる乾^{けん}の地にあつて、孤独の内に隠逸閑居の生活を営む兼明親王の姿に重ね合わせつつ、その去就の内に透かし見たのだった。

模倣の系譜・再び——「嵯峨院」から「六条院」へ

ミヤコの西北郊、〈天〉の方角に位置する嵯峨の地は、神仙世界に通ずる聖なる空間としてイメージされたばかりではない。春は桜、秋は紅葉を愛で楽しむミヤコ人たちの、遊興観覧の場としてもてはやされた。この地にいち早く隠居所を設け、陵墓もこの地に作らせた嵯峨天皇の遺徳を慕つてか、左大臣源融は「栖霞^{はいか}観^{かん}」を営み、兼明親王もまた、その晩年、隠逸閑居の暮らしをこの地に求めた。だが一方でこの嵯峨の地は、「嵯峨の隠君子」の生き方に象徴されるような、ミヤコ世界にみずからの居場所を失った人々が追いやられ、ひそかに隠れ住む〈翳^{かげ}り〉を帯びた場としての意味合いも兼ね備えた、多分に両義的な空間でもあった。嵯峨の地に揺曳するそうした意味合いを意識してか、物語の主人公光源氏もまた、この地に山莊を設けたとの設定が、『源氏物語』ではされている。ただし造営に至るその動機はいささか不純なものであったとの、いかにもらしい、作者紫式部によるアイロニカルな設定がされている。

嵯峨の地を選んで光源氏が御堂を建立したことは「絵合」の巻の末尾に至って初めて見え、次の「松風」の巻で、そのところの様子が、いくぶんか詳しく語られる。その地は左大臣源融の「栖霞観せいかかん」（現在の清涼寺釈迦堂の辺り）をモデルとし、明石の君の滞在する大堰の山荘（モデルはいうまでもなく兼明親王の山荘である）と対比されて、あたかもそれと対峙するかのような描き方がされている。⁽³³⁾

造らせ給ふ御堂は、大覚寺（＝嵯峨天皇発願の寺）の南に当たりて、瀧殿の心ばへなど劣らずおもしろき寺なり。これ（＝明石の君の住まい）は川づらに、えもいはぬ松陰に、何のいたはりもなく建てたる寢殿のこゝとそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり（源氏が造営されている御堂は大覚寺の南にあたつて、滝殿の趣向などはそれに劣らず雅趣に富んだ寺である。こちらの明石の君の住まいは川に面していて、実に見事な松の木陰に無造作に建ててある寢殿の簡素なありさまも、おのづと山里のしみじみとした風情を見せている）。

先にも見たように、明石の君は大堰の地にとどまって、なかなかミヤコに入ろうとしない。そうした状況のもと、あからさまに明石の君の許へ通うことで、紫の上が示す嫉妬の感情を煽り立てることはしたくない。かくしてその言い逃れのため、この地に御堂の造営を始めたように、文脈上はどうしても読めてしまう。終のすみか、どころの話ではない。それが証拠に、このあと、嵯峨の御堂への言及は、物語の中でパタリとやんでしまう。代わりに、六条京極の地に四町を占めて作らせた広大な「六条院」造営（一町が百メートルだから四町なら二百メ

―トル四方の広大なものだ―の様子に、もっぱら話題は移っていく。その乾（戌亥）の一角（それは嵯峨の大堰の方角である）に、明石の君を迎え入れてのちは、嵯峨の御堂も、もはや用済みということなのであらう。

嵯峨の御堂から、六条院の造営へと、大きくその叙述対象を移すにあたっては、作者紫式部による構想変更の可能性も考えられなくはない。だがそうではあるまい。御堂の造営のことがはじめて見える「絵合」の巻では、その造営意図が次のように語られている。⁽³⁴⁾

中ごろ、なきになりて沈みたりし愁へ（＝須磨明石のことをいう）に代りて、いまでもながらふるなり、いまより後の榮えは、猶命うしろめたし、静かに籠りゐて、後の世のことを勤め、かつは齡をものべん、と思ほして、山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせ給ひ、仏經のいとなみ添へてせさせ給ふめる（中途で生きる空もなく沈淪した嘆きの代わりとして、今まで生きながらえていられるのだ。今よりのちの栄華は、やはり寿命がともなわなければ危ぶまれる。静かに引きこもって後生のための勤行をし、また一つには齢を保ちたいとお思いになって、山里の閑静な地を領じて、御堂をお造らせになり、仏像や経巻の供養もあわせておさせになるようだ）。

しかし、それに続く語り手の評言にこめられた、なんとも皮肉なニュアンスが、はなはだ氣になるところだ。

末の君たち、思ふさまにかしづき出だしてみむとおぼしめすにぞ、とく捨て給はむことはかたげなる。いか

におぼしおきつるにかと、いと知りがたし（幼少の御子たちを思いどおりに育てあげたいとお思になるにつけても、すぐに世をお捨てになることはおできになれそうもない。いったいどのようなおつもりでいらつしやるのか、まことにもつて推し量りがたい）。

将来への布石を意図した光源氏の世俗的な思わくに対し、いささか批判的なこの語り、手の評言（「草子地」）には、作者紫式部の（声）も重ねあわせに響いているとみて間違いない。というのも先の光源氏の感慨は、白楽天の『曲江、秋に感ず二首、並びに序』に見える以下の文言、「風物改まらず、人事は屢々変ず。況んや予は、中なかは否ひにして後のちには遇ぐう、昔は壮さうにして今は衰おとろうるをや。慨然がいぜんとして感懷かんかいし、復た此この作有り。噫ああ、人生は故多こおほし、知らず明年の秋は又た何許いづこなるかを」を踏まえた状況設定と思われるからだ。この詩を起草して後、白楽天は、政争に明け暮れるミヤコ長安での栄達に見切りをつけ、みずから望んで杭州刺使を選び採り、地方へと下る。対して光源氏はそうではない。あくまでミヤコ世界にとどまり続ける。

嵯峨の御堂の造営は、明石の君を尋ねるための一過性の口実でしかなく、したがって六条院の造営によりその目的が達成されてしまえば、早々に忘れ去られる運命にあつた。それこそ、終つひのすみかどころの話ではないのだ。だがそのようにして嵯峨のトポスがないがしろにされよいはずはない。それどころか、六条院造営をめぐつて、「少女」巻には、眼を疑いたくなるような、とんでもない記述が、次のようにあらわれてくる。⁽³⁶⁾

中宮（＝秋好中宮）の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植ゑ木どもを添へて、泉の水とほく澄ま

し、遣水のおとまざるべく巖立て加へて、滝落として、秋の野をはるかに造りたる、そのころに合ひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の大堰のわたりの野山、無徳にけおされたる秋なり（中宮のお住まいは、もとからある築山に、紅葉の色が鮮やかになるような木々を植えて、きれいな泉水をはるかかなたに流し、鑓水の音がさらに冴えるべく岩を立て加え、滝を落として、秋の野のさまを広々と造つてある。それがちょうどこの季節を迎えて、今を盛りと秋草が咲き乱れている。さしもの嵯峨の大堰あたりの野山といえど、この庭には見るかげもなく圧し消されるほど素晴らしい秋の景色である）。

「ここかしこにておぼつかなき山里人（＝明石の君）などをも集へ住ません御心」（少女）とあるように、紫の上の養女として「二条院」に迎え取られた、というよりか強引に引き離され、奪い取られた娘の明石の姫君とは、「ここかしこ」分かれ分かれに、いまだ大堰の地にとどまる明石の君を呼び寄せるべく、光源氏は「六条京極のわたりに、中宮の御古き宮のほとりを、四町をこめて」（少女）、新たに広大な邸宅を造営する。問題なのは、その一角へと明石の君を迎えるに際しての記述である。「嵯峨の大堰のわたりの野山」を模すなら、それは明石の君の住まいに当てられた「冬の町」以外ではあるまい。なのに、邸宅内にミニチュア化され、矮小化された大堰の景を持ち込み、率先してそれを引き入れたのは、六条御息所の娘で、冷泉帝に入内して光源氏の権力基盤を支えた秋好中宮の「秋の町」なのである。しかも「無徳にけおされたる」とあるのだから、その驕り高ぶりようは目に余る。六条院造営における、そもそのボタンの掛け違いが、ここにみてとれよう。明石の君の側からしてみれば、その腹を痛めた姫君とは強引に引き離され、今また母方の曾祖父「中務の宮」より伝えた由緒ある嵯峨

の大堰の景物をも、光源氏によって横領され、秋好中宮の「秋の町」へと、勝手に移し換えられてしまったのだ。その無念の思いがテキストに書き込まれることは、ついぞない。だが六条院世界の水面下に潜在して、表向き華やかなその世界を内部から崩壊へと導くオルタナティブの役割を密かに果たしつづけることとなる。その過程を跡づけるのが、長大な「若菜上・下」の巻で始まる『源氏物語』第二部の世界だったとはいえないか。結果、最愛の女性である紫の上を失った光源氏は、第二部の最後「幻」の巻で、傷心のうちに出家の準備をし、物語世界からの退場を余儀なくされる。

宇治のトポス

嵯峨の御堂への言及がふたたびみられるのは、それからあるかののち、それこそ物語も終盤に近い「宿木」の巻においてだ（図版③参照）。宇治の中の君が匂宮邸（紫の上より相伝の「二条院」である）へと引き移ってのち、もぬけのからとなった「宇治」との対比のなかで、光源氏亡きのち、同じくもぬけのからとなった「嵯峨」の御堂の様子が、光源氏に代わり第三部の主人公として新たに登場してきた、不義の子薫の口を通して、次のように語られる³⁷。

先つころ、「宇治」にもものして侍りき。庭も籬もまことにいとど荒れはてはべりしに、たへがたきこと多くな。故院（光源氏）の亡せ給てのち、二三年ばかりの末に、世を背き給ひし「嵯峨の院」にも、「六条

院」にも、さしのぞく人の、心おさめん方なくなん侍りける。草木の色につけても、涙にくれてのみなん歸り侍りけり。かの御あたりの人は、上、下、心あさき人なくはべりけれ、方々つどひものせられける人々も、みな所々あかれ散りつつ、おのおの思ひ離るる住まひをし給ふめりしに、はかなき程の女房など、はたまして心をさめん方なくおぼえけるままに、ものおぼえぬ心にまかせつつ、山林に入りまじり、すずろなる田舎人などになりなど、あはれにまどひ散るこそ多く侍りけれ（先日宇治へ行つてまいりました。庭も垣根もまことにいよいよ荒れはてておりましたので、悲しみに堪えがたいことが多うございました。故院がお亡くなりになってからというものは、晩年の二・三年ばかり世をのがれてお住まいあそばした嵯峨院にしても、また六条院にしても、立ち寄る人は悲しみを静めようもないといった有様でございました。本草の色を見るにつけてもひたすら涙にくれて帰るばかりでございました。おそばにお仕えていた人々は身分の上下なく心のあさはかな人はございませんでしたけれど、あのお方このお方とあのお邸に集まつてお住まいだった女人がたも、みなあちらこちらに散り散りに別れては思い思いに世を捨てた暮らしをなさるようでしたが、身分の低い女房などもまた、まして気持ちの静めようのない悲しみのあまりに前後の分別もつかぬ思いに駆られては、出家して山や林に隠れ住んだり、なんとなく田舎人に身を落したりなどして、哀れにあてもなく行方の失せた者が多うございました）。

いささか引用が長きに及んだが、不義の子薫のまなざしを通して語られる「嵯峨」の地の、廃墟とも見まがう皮肉交じりの反転の図式を、しっかりと押えておきたい。

この薫、どうやらみずからのおもむく場所として、「嵯峨」とは対極の、巽（そん）の方角に位置する「宇治」の地を選び取ったようだ。そういえば、摂関家の陵墓が多く立地する木幡（こわた）の地を抜け、「宇治」へと向かうその道筋をたどるとき、薫の実父柏木衛門督（かしわぎ）（光源氏のかつてのライバル頭中将の息男であった）が、源氏ではなく、藤原氏の設定であったことに思い至るのである。⁽³⁸⁾

《注》

- (1) 『磯崎新建築論集』全八巻（岩波書店）、および磯崎新『見立ての手法』『建築の解体』（鹿島出版会）などの一連のシリーズ。
- (2) 引用は『空間へ』（河出文庫、二〇一七）所収「都市デザインの方法」（一九六三）。
- (3) 引用は『空間へ』（河出文庫、二〇一七）所収「年代記ノート」第10章。
- (4) ナチ党所属を問題視されたハイデッガーは、戦後一九五二年まで公職追放されていた。ナチスへの加担は現在でも「ハイデッガー問題」としてしばしば論争的（まじ）となっている。
- (5) 藤田勝也『平安貴族の住まい―寝殿造から読み直す日本住宅史』（吉川弘文館、二〇二一）は、発掘調査の成果を踏まえつつ、寝殿造りの特質を明らかにする。しかし、なぜ寝殿造がそうした形態を採るのかについての説明は十分になされていない。
- (6) ベルリン大学で文献学を学び、東京大学で教鞭を採った羽賀矢一（二八六七―一九二七）の『国文学史十講』（一八九九）の影響が極めて大きく、そこに取り上げられた作品評価が現在でも日本古典文学史の流れを規定している。
- (7) 単なる情報伝達手段としての「横書き」書式と、表現の工夫に芸術性を見る「縦書き」書式の対比で言えば、思想史研究者は対象テキストを「横書き」書式で捉えている。この件に関しては深沢「平成版『横書きのすすめ』―水村美苗『私小説―from left to right』を手がかりに」（神奈川大学人文学会『人文研究』186、二〇一五）を参照のこと。

- (8) 兼明親王に關しては、大曾根章介『兼明親王の生涯と文学』（『日本漢文学論集』全三卷、汲古書院、二〇〇〇、所収）に詳しい。
- (9) 皇籍復歸に關しては、『栄華物語』卷二「花山たづめる中納言」に見え、また兼通と兼家兄弟の確執については、『大鏡』卷三「太政大臣兼通伝」に見える。

- (10) 「明石」巻の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語二』（岩波書店、一九九四）66頁。
- (11) 「松風」巻の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語二』（岩波書店、一九九四）191頁。
- (12) 「明石」巻の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語二』（岩波書店、一九九四）66頁。
- (13) 白楽天『琵琶行』成立の経緯については、その原拠ともなった「夜、歌う者を聞く」の詩も含めて川合康三訳注『白楽天詩選』（下）372頁の「解説」による。

- (14) 「松風」巻の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語二』（岩波書店、一九九四）198頁。
- (15) 「祭龜山神文」の引用は、新日本古典文学大系『本朝文粹』（岩波書店、一九九二）103頁。

- (16) 『後漢書』耿弇伝に見える逸話を踏まえる。戊巳校尉となった耿恭が匈奴と戦って渇水に苦しんだ時に水を得た方策が述べられている。

- (17) 『類聚国史』承和九年七月十五日条の引用は「国史大系」による。

- (18) 「嵯峨隠君子」については、早くに益田勝実が「心の極北」（『益田勝実の仕事2』ちくま学芸文庫、二〇〇六所収）というエッセイで取り上げ、それに導かれて筆者も「忌まわしき（嵯峨）のトボス」と題した文章を書いたことがあった。それとの重複を避けつつ、ここでは「嵯峨隠君子」にまつわる伝承のいくつかを紹介する。

- (19) 『江談抄』の引用は、新日本古典文学大系『江談抄 中外抄 富家語』（岩波書店、一九九七）206頁。

- (20) 『江談抄』の引用は、新日本古典文学大系『江談抄 中外抄 富家語』（岩波書店、一九九七）131頁。

- (21) 蜘蛛（ささがに）については同じく『江談抄』卷三の一「吉備大臣入唐の間の事」で、難解な野馬台詩の読解を唐人たちに迫られた吉備真備が神仏に助けを求めると、その使いとして「蛛一つにはかに文の上に落ち来て、いをひきてつづくるをみて読み了んぬ」との逸話が語られている。

(22) 上原作和『光源氏物語學藝史—右書左琴の思想』(翰林書房、二〇〇六)、同編『アジア遊学126—〈琴〉の文化史 東アジアの音風景』(勉誠出版、二〇〇八)、西本香子『古代日本の王権と音楽』(高志書院、二〇一八)など。

(23) 待賢門院璋子については角田文衛『待賢門院璋子の生涯—淑庭秘抄』(朝日選書、一九八五)に詳しい。

(24) 『今鏡』の引用は、竹鼻績全訳注『今鏡(中)』(講談社学術文庫、一九八四) 653頁。

(25) 『酒頼童子』説話の発生に関しては、佐竹昭広『酒吞童子異聞』(岩波書店、一九九二)、高橋昌明『定本 酒吞童子の誕生』(岩波現代文庫、

二〇二〇)などに詳しい考証がある。

(26) 白楽天の「中隠」詩は、川井康三訳注『白楽天詩選』(下)、215頁による。

(27) 『菟裘賦』の引用は、新日本古典文学大系『本朝文粹』(岩波書店、一九九二) 6頁。

(28) 『菟裘賦』の引用は、新日本古典文学大系『本朝文粹』(岩波書店、一九九二) 7頁。

(29) 隠公謀殺に関しては、新釈漢文大系『春秋左氏伝』(明治書院)を参照のこと。

(30) 前掲注(9)参照。

(31) 『菟裘賦』の引用は、新日本古典文学大系『本朝文粹』(岩波書店、一九九二) 8頁。

(32) 「独善・兼濟」の生き方については、川合康三訳注『白楽天詩選』(下) 380頁の「解説」による。

(33) 「松風」巻の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語二』(岩波書店、一九九四) 193頁。

(34) 「絵合」巻の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語二』(岩波書店、一九九四) 185頁。

(35) 白楽天「曲江、秋に感ず二首、並びに序」は、川合康三訳注『白楽天詩選』(上) 72頁による。

(36) 「少女」巻の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語二』(岩波書店、一九九四) 323頁。

(37) 「宿木」巻の引用は、新日本古典文学大系『源氏物語五』(岩波書店、一九九四) 44頁。

(38) 「宇治」には藤原頼通の造営した宇治平等院がある。その前史として撰関家代々の宝物を収蔵した「宇治宝蔵」があった。この件に関しては、田中貴子『外法と愛法の中世』(平凡社ライブラリー、二〇〇六)所収「宇治の宝蔵—中世における宝蔵の意味」に、詳しい考証がある。